
ひがんのきょう

狐禅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひがんのきょう

【Nコード】

N7574W

【作者名】

狐禅

【あらすじ】

「目をそらし、見つめている風景もまた、現実だ。

のであれば、

私は喜んでそのまやかに手を染めよう、邪教の教えを崇拝しよう、

偽りであっても、それであいつが笑って日々を過ごせるのなら

汰するつもりだ」

私は命を捨て、あいつの笑顔を失わせる教えを洵

―――詳細不明

零話（前書き）

意^{おもい}は諸法^{すべて}のさきに立ち

諸法^{すべて}は意^{おもい}に成る

意^{おもい}こそは諸法^{すべて}を統^すぶ

「法句経」より

零話

静かに、小雨の降る夕暮れの中、私は急ぎ家路についていた。

西蓮寺からの帰りであった。

西蓮寺、と言うのは、私の住んでいる庵から半刻ほど歩いた山の中にぽつりと建っている、小さな寺のことだ。

すでに日課となった妻の墓参りを終わらせ帰り道にさしかかったころ、天候の予想がはずれ、運悪く雨が降り出してしまった。

あいにく私には傘の持ち合わせがない。少しでも早く帰ろうと、いつも歩く道とは別の、少し奥まった山道を歩くことにした。普段は道が悪いのであまり使わないが、ここなら、回り道をせずに家に帰る事が出来る。

家までの道のりがもう半分ほどにさしかかったころ、木の下に、ふと、何かが坐っている事に気がついた。

網代笠を被った、小柄な老人である。

老人は木の下で雨をよけ、寒さに耐える様に縮こまりながら、首を下に傾ける様にして坐っている。

旅の途中で、歩けなくなったのだろうか？

そうだとすれば危険だ。まだ季節が夏とはいえ、秋になりかけた

今の時期では夜も冷える。この雨では、老人の体にとってはつらいものがあるだろう。

このまま放って置くのは気が引ける。

なるべく面倒に関わり合いにはなりたく無いが、明日になってこの老人が倒れでもしていたら寝覚めが悪い。

——しかたがないな。

渋々、声をかけることにした。

「——大丈夫か？」

そう声をかけると、老人は始めて私がいる事に気がついたかのようになり、肩をふるわせ、ゆっくりと私の方を仰ぎ見た。

——そこで、

少しだけ、私は動きを止めた。

てっきり、老人は苦しさに顔をゆがめているものだばかり思っていたのに

老人は、にこにこことほほえむようにして——笑っていたのだ。

「あ、・・・・・・・・いや、行き倒れかと思ったんだが」

慌ててそう言うと、老人は笑いながら首を振った。

——狂人だろうか

そう思えるほどに、老人は陽気にほほえんでいる。

まるで、ここで、こうして坐っている事を、心の底から喜んでいるように。

——しかし、

狂人で無いことは、老人の目を見ればすぐに分かった。

その老人のあまりに聡明な瞳に、背筋が凍り付くような感覚を覚えた。

まるで全ての真実を見据え、それでいてその真実を暖かく包み込んでいるような——そんな瞳。

一体何者なのだろうか？

見ると・・・・・・・・あまりにぼろぼろので始めは分からなかったが・・・・・・・・老人は黒い法衣を着ている。

あぐらの様に坐っている足の上には、僧侶が乞食で使う鉢を抱えていた。

——なるほど、乞食僧か。

ちっ　——と、軽く舌打ちをした。

しかし、どうやら、歩けなくなったというのは私の思い過ごしだったようだ。

「悪かったな、邪魔をして」

そういつて踵をかえそうとするが、ふと思うところがあり、その動きを止めた。

それにしても――

老人は、もう私を忘れたかのように、さきほどと同じように首を下に傾けながら、ゆったりと坐っている。

衣からわずかに見える腕は枯れ枝のように細く、顔のくすんだ褐色に近い肌も、瞳の力強ささえ無ければ、そのまま棺桶に入っても死者と区別はつかないほどに疲弊しているように見える。まるで、生きてきたうちの苦勞がそのまま外側に現れているかのような……そんな印象を受ける姿である。

――これほどまでに

これほどまでに苦勞して――、一体どんな境地を得ようと言うのだろうか。

この老人は仏教の修行僧であろう。

仏教の知識などはまるで無いが、仏と同じように修行し、仏と同じように悟ることを目的としていることくらいは分かる。

しかし、

——悟り。

何事もとらわれることのない、生老病死の苦しみからすら解放された境地。

そんなものが、本当にあるのだろうか？

そんなものは神頼みにも等しい、ただの幻想にすぎないと……
・私には、そう思えてならないのだ。

この老人は……そんなあるかどうかとも分からぬ境地を求め、腕や足が枯れ枝のようになるまで教えを守り、そして、死んでゆくのだろうか？

そのような人生で、この老人は本当に満足なのだろうか。

本当に……仏の教えた法というものは、そこまで命をかけるのに値するものなのだろうか？

「なあ」

気づくと、

私は、知らず知らずのうちに老人にむかい、口を開いていた。

「あんたたちの言う、仏法というのは一体何なんだ？」

その言葉に応じたのか、老人はゆっくりと腰をあげ、自らの衣の

袂をあさりはじめた。

——教えの書かれた経本でも、取り出そうというのだろうか。

しかし、私の予想に反して、袂から出てきた出てきた物は……

——手鞠？

それは、手作りとおぼしき、使い古された手鞠だった。

所どころに破れたあとがあったが、大切に扱われているのか、ひとつひとつ丁寧に補修されている。

——しかし、

なにが、言いたいのだ

これが、法だとも言うのだろうか。

私は何も言わずにいと、老人は、子供が見せるような無邪気なほほえみのまま、ぽんぽんと鞠をつき始めた。

ひい
ふう
みい
よお
いつ
むう

老人のしわがれた声が静かに森の中にこだまする。

ひとつき、

ひとつき、

ひとつき、

鞠は老人の手から離れ、地面の上で跳ねる。

ぽん

ぽん

ぽん。

ちいさな鞠は、まるで老人の体の一部のように、老人の手によって正確に跳ねている。

老人は、地面に跳ねた鞠を、まるで産湯につかった子供を母親が優しく包み込むようなように、正確に、丁寧に、慎重に受けている。

ここのつ

とお。

とお、まで数え、いったん手にとった鞠を、そのまま私の前にかげた。

——私に鞠をつけ、とでも言いたいのだろうか

洪々、鞠を手取る。

手作りである以外は、何の変哲の無いただの鞆である。

ついてみる。

ぽん

ぽん

ほ
・
・
・
・
・
・
・
・
・

「あ、」

みつとも出来ないうちに、鞠があらぬ方向に飛んでいった。

急いで鞆を追いかけ、手に取る。

もう一度。

ぽん

ぽん

ほ
●
●
●
●
●
●
●
●
●

今度もみつつを数える前に終わってしまった。

・
・
・
・
・
・
・
・
やはり、
できない。

よくよく考えて見れば、補修の後が、鞆に歪な凹凸をつけている。こんなに補修だらけの鞆がまっすぐに跳ねる訳がない。

が、

老人があまりに簡単にそれをやってしまうので、こちらも容易くそれが出来ると勘違いしてしまったのだ。

諦めて鞆を老人に返そうとすると、老人はそれを拒むようにしてゆっくりと手を振った。

そして、

——名前は？

始めて老人は私に向かい、そう、尋ねた。

「………覚才と、言います」

気がつく——私は自分の名を告げていた。

——そうか、そうか。

にこにここと、楽しそうにほほえむ。

——またおいで。

そう言っ、老人は私の手に鞆を残したまま、

——ゆっくりとその場を去っていった。

一話 平穩（へいおん）（前書き）

一大事と申すは今日ただ今の心なり、それを疎かにして翌日あることなし。すべて遠きことを思いて謀ることあれども的而の今を失うに心づかず

——正受

老人

一話 平穩（へいおん）

「覚才覚才覚才覚才〜！！」

まだ日が昇って間もない頃、乱暴に戸を開けるものがあつた。

——またうるさいのがやってきた。

玄関を上がりながら履き物を脱ぎ捨てて、（せめて土間に脱ぎ捨ててほしい）鬼貫

が私の家に上がり込んできた。

「鬼貫^{おにつら}」は鬼臥^{おにぶせ}という名の双子の妹と一緒にいる、歳が十二（確か・・・？）の娘達である。

肩まで掛かる黒髪に、鬼貫は黒の衣に曼珠沙華の刺繍。鬼臥は黒の衣に桔梗の刺繍が成されている。正直、ある特徴さえ見なければ、鬼貫と鬼臥の区別はつかない。

衣を変え、後ろ姿であれば判別できないだろう。

——まあそれも、「口を開かなければ」なのだが

「おまえ、そんな万年床で寝てるとひからびて死ぬぞ！」

「うるさいぞ・・・、鬼貫」

寝起きの頭に響く・・・

姿形は似ていても判別は出来る。

と言うか、見なくても判別出来る。

うるさい方が鬼貫だ

騒がしい方が鬼貫なのだ

「もう朝だぞ！覚才！」

鬼貫に布団を引っぺがされる。

ちなみに鬼臥はおとなしく鬼貫の横暴を止めようと、鬼貫の裾をひっぱってくれている。

はっきり言って無力に等しいが、私の睡眠を守ろうとするその心根を感じて、涙が出てくる。

良い子だなあ。

しかし、この暴れ馬の如くに私の睡眠を侵害する童女を何とか出来ないだろうか・・・

昨日は忙しかったんだよ。

この顔色で察してくれ

お前には、無理だろうがな。

「ここまでしても起きないのか・・・お前このままその積み

重ねられた本と一緒に封印でもされたいのか？」

——しかし二十三の歳もこえて、こんな童女にお前呼ばわりされるとは・・・・・・・・私の威厳も地に落ちた物である。

ま、もともと無いようなもんだけど。

と言うか、無い。

封印・・・・・・・・できるもんならされたいな・・・

冬眠みたいなもんだろうか？

さぞ気持ちよいだろうな・・・

まあいい。

このまま起きなければ、鬼貫がこの積み重ねて塔の様になっている私の蔵書を一つずつ私に向かって倒してくるのは目に見えている。

と言うか、いつもやられているのだ。

このままでは本当に蔵書に封印されかねない。その前に起きなければならぬ。

とりあえず両手をあげ、起きていることを鬼貫に気づかせる。

「鬼貫ほら起きた！起きたぞ！——ぐはっ！」

一つ目の塔が倒された。

うむ、なるほど。目を閉じていたのがいけなかったらしい。

こんどは目を開けてしつかりと鬼貫を見据え、両手をあげる。

「ほら！起きてるぞ！」

二つ目の蔵書の塔を倒された！

くそ！やっぱり身体を起こさなきゃいけないのか

そりゃ私にとっては最大の譲歩だぞ……………。

寝起きに意思に反して身体を起こせとは……………どれだけ私に苦行を強いるつもりだろうか？

とにかく蔵書を倒されてはたまらないので、最大のふんばりをみせ、上半身を起こし、鬼貫を正面から見据える。

「ほら、起きたぞ！ おはよう鬼貫。今日も良い天気だな！」

これ以上ないくらいにさわやかな笑顔を見せて鬼貫に笑いかける

三つ目の蔵書の塔を倒された。

なんだ、こいつ、私に恨みでもあるのか？

何がいけなかったんだよ。

もはや私を起こす事じゃなくて、蔵書を倒すことが目的なんじゃない

いかと疑いたく
なってくるな……

まあ私も大人だし、物事は穏便にすませたい。おそらく鬼貫は鬼貫なりに考えがあって行動しているのだろう。やはりそれを大きな狭量で見守り、この可能性を秘めた将来を持つこの童女達を見守るべきでは無いだろうか。

それが大人の役目だ。この覚才に与えられた使命と言えるだろう。

「さあ、この上ない朝だ、今日も一日すばらしい一日を過ごそう！」

四つ目の蔵書を倒される。

計数二百冊超の蔵書に埋もれて、そろそろ身動きがとれなくなってきた……

蔵書のせいで起きられない。

本末転倒にもほどがある。

もしかして本当に封印するつもりだろうか……

——と、考えてる間に五つ目の蔵書が倒れてきた。

「だぁ！！お前何がしたいんだよ、お前、あぁん！？」

ぶちぎれた。

使命なんか知ったこっちゃ無い

狭量なんか関係ない。

こっちは眠いんだよ！

寝かせろよ！

なんだってするから！

こうなってしまうたら、私にだって手段があるぞ。

出来れば使いたくない手だがな！

私はかっと目を見開き、さらなる蔵書に手を掛けようとする鬼貫の腕をつかみながら――

「――寝かせて下さい。なんでもしますから」

――下手に出てみた。

こんなんだから、威厳が無いのだと思う。

「戸棚のかりんとうが食べたい」

「勝手に喰ってくれ」

かりんとうは惜しいが、かりんとうの一袋や二袋くらいで眠り続けられるのなら、安い物だ。

――これで、ようやく平穏な朝が守られた。

こうして、今日も長い一日が始まった。

まあ、正確には始まっていないのだが・・・。

二話 あれこれ

蔵書に山に封印されたまま、正午を一刻ほど過ぎたところに目が覚めた。

とは言っても、目が覚めた所で、埋もれたままなのは変わらないのだが……

いつそのまま、来年の春まで寝ていたかったよ……

ふと隣を見ると、鬼臥が、私の隣で眠りこけていた（どうやって蔵書の山をかき分けて布団に入って来たのかは分かりかねるが……）

しかし、よく寝てるな。

非常にかわいい寝顔である。

この寝顔には癒されるな。

頬をつついても起きないだろうか（どのみち動けないのだが）

ちょっと、触ってみたいな。

やわらかそうだ。

ぷにぷにしてるだろう。

もちみたいに。

.....。

このきわめて犯罪的な状況と思考から早く脱する為にも早く起きなければいけない。

まあ、こんな考えをしてる時点ですでに脱しかけてはいるのだが・
・
・

その時、

「覚才、いるか〜〜？」

まずい。

だれか来た。

この状況を見られるのは、非常にまずいな。

と言うか、蔵書にの山に埋もれながら、一緒の布団に童女と寝てる状況って・
・
・

どんな性癖だよ、私は。

すたすたと、誰かが上がり込んでくる。

まあ、見なくても声で誰だかは分かるが。

この声は

暦縁れきえんしかない。

「覚さゝ・・・・・・・・うお！？　なんだ、この本の山は！？」

予想どうり早速見つかってしまった。

狭い家が災いした。

こうなりや諦めるしかないな・・・。

正直に話すしかない。

なにを？

「お、ふえひえん、ふいはのはゝ」

と、いざ蔵書を探られんとするときに、鬼貫の声が聞こえた。

もごもごと口に何かを含んだような口調で。

途中でぼりぼり音が聞こえる所から察するにかりんとうだろう。

助かったのはいいが

——あいつ朝から食ってたのか？

私のため込んだ三月分のかりんとうを半日で食い尽くす気か？

いや、まさか、

ありえない。

百袋は買ったはずだぞ？

私の一日の楽しみが！？

私のかりんとう分が！？

「お、鬼貫、お前も来てたのか——む？　かりんとう旨そうだな」

「暦縁も食うか？　残り少ないがな　ぼりぼり」

「残り少ないだと！？」

思わず蔵書の山をかき分けて、勢いよく起き上がっていた。

私のかりんとうがいま失わんとするとき、その他の雑事は気にしていられない。

「お、覚才起きたのか」

「なんだ、そこに居たのか覚才、・・・・・・て、お前何で鬼臥と寝てるんだよ！？」

「そんなことはどうでもよろしいのだよ」

口調が変だが気にしない。

「鬼貫、私のかりんとうは？」

「まだ、あるにはあるけど、後一袋しかないぞ？　ぼりぼり」

「一袋だと！？」

「む、まだ余ってるのか？　ならご相伴にあずかりたいな」

「駄目に決まってるだろ！、あと一袋だぞ、それを食おうとは、卑しいぞ、曆縁！」

「いい大人がかりんとう一つで・・・卑しいのは覚才だろ？　ぼりぼり」

「お前には一番言われたくないわ！　鬼貫！」

只でさえ、この庵は人里離れた山奥に建ってるのに・・・？

次に行商人が来るまで、あと何日だ？

それまで私は何を食べて生きてればいいんだ？

とにかく！

あと一袋は私のだからな、誰にも渡すわけにはいかない。

あと三ヶ月のかりんとう分をどうやって補えばいいんだ・・・？

と――

「かりんとー・・・・・・・・・・?」

そのとき、目をこすりながら、鬼臥が目をさました。

「覚才・・・・・・・・・・かりんとー」

くい、と私の裾を引っ張る。

「むお・・・・・・・・・・!?!」

「かりんとー、ほしい」

「なう!?!」

「ほしい・・・・・・・・・・」

目をこすりながら上目遣いで私を見つめる。

・・・・・・・・・・まけました。

かりんとうをあげるから、私をそんな目で見るな・・・・・・・・・・。

・・・・・・・・・・さて

私のあと三ヶ月分のかりんとうはどうやって補おうか・・・・・・・・・・?

三話 曆縁

「それで、何の用だ、曆縁」

この男の名は、曆縁^{れきえん}という。

半年ほど前から西蓮寺に住み着いた、流れ者の僧である。

整えてあるのか無いのか分からないばさばさ頭に無精ひげという、一見して僧とは分からないような格好をしている。

歳は、おそらく私と同じ二十三か——同じとは言えなくとも、そう離れてはいないだろう。

半年の付き合いがあるが、私はほとんど曆縁のことを知らない。

せいぜい、過去に教団から追放された破戒僧、ということくらいだろうか？

行脚の途中で立ち寄った西蓮寺が住職のいない荒れ寺だったこともあり、しばらく旅の疲れをとっている間にそこが気に入って、そのまま住み着いているらしい。

西蓮寺には、妻であった沙代の墓がある（住職が居なかったので勝手に作った）

墓参りを日課にしていた私にとって、曆縁と出会うのは必然だったのだろう。

今は、何となく仲良くなり、一緒に酒を飲んだり、食物を布施したりしている。

こいつのことを一言で言うと、「不思議な男」だ。

——説明になってないか。

暦縁が西蓮寺に住むようになってから、近くの村人（近くといってもかなり距離は離れているが）が西蓮寺に通うようになった。

どうも暦縁の話聞きに、わざわざ足を運んでいるらしい。

——険しい道のりを歩きながら。

それだけの事をさせるだけの魅力が——暦縁にはあるのだろう。

とにかく。

不思議な、男なのだ。

「うむ、実は先日の暴風雨で寺の屋根が壊れてな、一人で修繕するのにはどうしても手がたりん、そこで……」

「……まさか、手伝えと？」

まさか、私に労働の手伝いを申し出るとは。

あらかじめ言っておくが、労働は大の苦手である。

金槌より重いものは持ちたくない。

「修繕道具でまさかのお手上げか・・・・・・・・？ どの貴族だよ、お前・・・・・・・・」

「はっきり言って私は戦力外だ、野外で作業など出来る訳もない。それは暦縁が一番よく知っているだろう？」

「なんでちよつと威張ってるんだ」

暦縁が呆れ顔で言う。

しょうがないだろう？

むしろ日中、太陽の下で立ってるだけで立ちくらみがするくらいなのだ。

私のも貧弱さを舐めて貰っては困る。

「だから、もやしみたいな青白い顔してるんだな！」

と、私の肩に手を置きながら最大限に気を抜いて言う鬼貫。

お前が言うな。

これでもかりんとうがあれば多少は動けたんだからな。

・・・・・・工具箱が持てるくらいは。

今は、かりんとうが無くなった落胆もあつて一步も動きたくないのだ。

唯一の救いは、私のあぐらの上でちょこんと座りながら、懸命にかりんとうを食べている鬼臥の姿を見れたことくらいだな。

・・・・・・実に癒されるなあ。

「とにかく、食事と茶菓子くらいなら提供出来る、あと家事の方は任せろ、私が手伝えるのはそれくらいだな、それ以上のことをやるとお前の足を引っ張るだけだ」

そう言うと、暦縁は始めからそう言われることを分かっていたような顔をして

「わかった、それで手を打とう」

にっこりと笑ってそう言ったのだった。

四話 午後のひととき

・・・・・・・・暑い。

西蓮寺へ行き、手伝い始めるまでは良かったのだが――

――暑いのだ。

いくら季節が秋とはいえ夏の暑さがまだ少し残っている。

私は暑さにはめっぽう弱い。

まあ、だからといって寒いのが得意というわけでもないのだけど。

日に照らされて体力が削られ、身体はもうふらふらだった。

基本的に日陰者の私には（意味が違う）一刻以上の外出は命に関わる。

なるべく日陰に避難しながら、もくもくと作業を続けていた。

私が何をしているのかというと――

ひたすら、「おにぎり」を作っていたのだ。

「おい覺才、その角材とてくれ」

「何度も言うが、私が持てるのはシャケおにぎりくらいだぞ」

「さっきより力が無くなってないか……?」

曆縁が屋根の上から、私に声をかけてくるが、まともに答える余裕はない。

私の貧弱さをなめないでほしい。

始めから戦力と考えないでくれ。

「――まあいいか、シャケおにぎりでもいいから取ってくれ」

いいのか……

曆縁もあまり物事にこだわらない性格だな。

――というより、始めから期待して無いのだろうけど。

曆縁は、律儀にもはしごの上から降りてきた。

私の横に座り、手渡されたシャケおにぎりを旨そうにほおぼる。

しかし、生臭物を平気で食べる所を見ると、やはり曆縁も破戒僧なのだな、とつくづく思う（それを見越してシャケおにぎりを作る私も私なのだが）

鬼貫が私達より先にシャケおにぎりを食べ（こいつの胃袋は別の世界にでもつながってるのだろうか？）横で鬼臥がなれない手つきで茶をいれている。

そうとう色が薄いのはご愛敬である。

「しかし、なかなか難儀なことになってるな」

屋根を見上げながらそう言う。

先日の暴風雨のせいで、瓦が数枚落ち、屋根に大きく穴が開いている。

もともとから相当な荒れ寺だったが、屋根くらいはしっかりと残り、雨漏りも無かった。

この穴の開きようであれば、穴から雨が直接寺の中へはいつてくる。おそらく風に飛ばされた木か何かが、屋根に突き刺さったのであるう。

確かにこのままであれば、部屋によっては、中での生活に支障をきたす。

「屋根の下は、一体どの部屋だったんだ？」

何気なく聞くと、暦縁は

「ただの物置だよ、」

と、興味なさそうに短く答えた。

なんだ。

それならば、直す必要は無かったのじゃないだろうか？

もともと、人住まぬ荒れ寺なのだから、暦縁の住まう場所さえあればそう困らなかつたろうに。

「何をいうか、僧として寺を大切にするのは当然だろ？」

私がそう尋ねると、したり顔でそう言った。

そんなところは僧侶なのだな。

あいかわらずこいつは、何を大切にしているのか基準が分からん・
・・・

おにぎりを食べ終わり、鬼臥の入れた茶を飲み終わったところで、
暦縁が勢いよく立ち上がった。

「よし、小腹も満たしたし、仕事を続けるか！ 覚才、角材持つの
手伝ってくれ」

「私にそんな物を持てとは、両腕をへし折れと言っているようなも
んだぞ」

「いくらなんでも弱すぎないかおまえ！？」

とにかく

その後も作業は続き、（私よりも鬼貫の方が役に立った）夕暮れになる頃には、雨漏りの心配も無いほどに屋根が修繕されていた。

五話 帰路

片付けも終わり、一息つく。

「ありがとう、覚才」

「いやいや、私は何もしていないぞ」

本当に何もしていない。

昼飯と、茶とその茶請けを用意しただけである。

ついでに晩飯作りと家事くらいか……

「いや、それだけで十分助かったよ」

そう言って、暦縁はにっこりと微笑む。

「それなら良かった、こんな手助けでよければいつでも呼んでくれ」

「ああ、頼む」

その言葉を聞いて、踵を返そうとすると、暦縁がそれを引き留めた。

「しかし、本当に晩飯は一緒に食べなくていいのか？ せっかく、鬼貫と鬼臥が食べていくのだから、晩飯くらい一緒に食っていけよ
今から帰って作るんじゃない、食べるのも遅くなるだろ。」

そう、言った。

私が作った晩飯。暦縁は一緒に食べるつもりだったようだが、私がそれを辞退したのだ。

ありがたい申し出なのだが――

「いや、すまない、私は――」

――家に帰って、妻の霊膳を作らなければいけない。

晩飯の席に私が居なければ――沙代が、寂しがるかもしれない

「――ああ」

と、

最後まで言い終わらぬうちに、暦縁がそれを察したようにうなずいた。

暦縁には妻の沙代のことを話してある。

「やはりおかしいかな。私も、頭では沙代の死を受け入れているつもりなんだがね。恥ずかしながら、晩飯の席は沙代と同じくしなければ、どうも座り心地が悪いんだ」

私がそう言うと、暦縁は微笑んだ。

「別におかしくは無いさ。それだけお前は妻を大切にしていたと言うことだろ？何も恥ずかしがる事は無い」

——そう言われると余計に恥ずかしい。

「しかし、あまり心に重荷をかけ過ぎない方がいい、それが原因でお前がふさぎ込んでしまえば元も子もない。なに、忘れてもお前の妻は恨んだりはしないだろう。——もつともそれは、お前が一番よく分かってるだろうがな」

「——そうだな」

まあ、

そんな奴だったからこそ、ここまで忘れられずにいるのではあるが。

沙代が生きていた頃には、いつも仕事で帰りが遅く、晩飯の時にしか沙代と話す時間が無かったのだ。

一度だけ………仕事のせいで晩飯時に帰れず、沙代の食事を無駄にしたことがあった。

そのとき、仕事がどれだけ忙しかろうと、晩飯は一緒に食べる事を沙代と約束したのだ。

沙代は「無理しなくてもいいのに」と笑っていたが、沙代にとって、一人での生活は相当に辛かったと思う。

せめて

———沙代の目が、見えていれば——
少しはその生活も変わったろうに。

沙代は、私が帰って来るといつも嬉しそうに出迎えてくれた。

晩飯を用意して。

目が見えずに作るのは相当に困難だったろう。

物書きになった今ならば、少しは沙代を守ってやれたのだが。

———沙代は、殺されず
にすんだのだろうか。

そんな私に、恨み言の一つでも言ってくれていれば、少しは心が晴れたかもしれない。

でも、

あいつは——

「覚才」

私が少しだけばお、としていると、暦縁が強めの口調で私の名を呼んだ。

——気を、使ってくれたのかもしれない。

「帰るのであれば、早いほうがいい。日が暮れてから西蓮寺の石段を下るのは危ないぞ」

——確かに。

あの西蓮寺の石段を日暮れに下るのは少々つらい。

「・・・・・・・・そうだな、それじゃあ、帰るよ」

「帰り道、気をつけてな」

「ああ」

そう言って、私は西蓮寺に背を向け、歩き始めた。

開題

西蓮寺は、諸嶽山しょがくさんと言う山の山頂近くに建っている。

まあ、山頂といえども、村から歩けば半時もかかずに着く距離であるのだが。

とにかく、道のりが急なのだ。

特に最後にさしかかる頃にある石段は、参拝者が苦勞するように造られたのかと疑うくらいに、急な斜面のあるつくりになっている。

いくらなんでも、これは寺に拝する人が困るのではなからうか？

こんな所に寺があるから、石段が急になるのもしかたがなかったとはいえ、いくらなんでも不便すぎる。

まるで、来る者、去る者を拒むかのような造りに——

ん・・・・・・・・・・？

・・・・・・・・すこし、違うか？

拒む、と言うより。

まるで、「慎重にならざるおえない」状況に追い込むような、そんな造りに、なっているのだ。

「はぁ——」

ため息をつく。

今からこの石段を下りることを考えると、少しだけ憂鬱な気分になる。

辺りはすでに、色彩の一部が狂ったような朱色にそめられている。

これ以上に日が落ちれば、山歩きは困難になる。

特にこの石段は越えておきたい。

早く、帰らなければ——

萎える気持ちを奮い立たせ、私は一歩目を踏み出した。

竹林を纏うようにして伸びた石段は、西蓮寺の象徴のように急な斜面を携えながら堂々と境内の行く手に構えている。

段数は統べ二百六十二段、暇つぶしに（気をまぎらわせる為に）数えた石段の数である。多分合っているはずだ、何度も数えたのだから。

この石段を下るときに、考え事やよそ見をしていれば容易に足を踏み外す。

踏み外せば下まで滑り落ちるだろう、おそろくただではすまない。

——ただではすまないが故に、ここを下りる者は皆、慎重になる。

そのため、今のところ、私の知る限りでは足を踏み外したものはない。これはこれで、かえって安全なのかもしれない。

ゆっくり、慎重に石段を数を数えながら下りていると、いつの間にか妙な気分になる——なんといったらよいだろうか——なにかこう、どんどん自分という意識が溶け込み、体と心が無くなって行くよう——

有り体に言えば、心地よい気分になってくるのだ。

——そして、町の鐘の音や、鳥の鳴き声に心驚かせ、はっと我に戻る。

まるで、この世とは別の、どこか遠いところに心を飛ばされた様な、妙な感覚だけが残る。

それは、

どこか懐かしく、どこか、淋しく、

その感覚をいつでも心のどこかで求め続けているような――

そんな――感覚なのだ。

今のような夕暮れの刻には特にそんな気分になりやすい。

一段

二段

三段

四段

五

ろく

そうやって、心を歩と呼吸と数に一体になる感覚。

まるで、自身の自我が雲散霧消し、周りの空気に溶け込むような、不思議な感覚に包まれるような――

そんな、気分になるのだ。

悪い気分ではない。

——しかし、

今回は、そのような気分にはならなかった。

石段の中頃、丁度イチョウの木の下の陰りの中に——

見慣れぬ——娘が立っていたのだ。

歳は――十二、三だろうか

夕焼の中でもそれと分かるような、濃く、赤い、衣の娘だった。

赤い衣に相對するような白磁の壺にをおもわせる青白い肌――

ほんの少しだけ赤みがかかったように見えるのは、夕焼の赤が映っただけなのかもしれない。

凧いだ夜海を思わせる静かな黒髪を肩までかけ、びいどろのように透きとおったおおきな蒼い瞳をこちらにむけて静かに、精気のない、この世の者ではないような幽玄佇まいで、石段の上に立っていた。

まるで私を待っていたかのように――と表するのは私のうぬぼれか。

現に、娘は私をひとしきり一瞥したあと、ふと興味を無くしたように私から目をそらし、石段の路を外れ、竹林の中に消えていった。

ざわざわ、と銀杏の葉のざわめく音だけが、朱色の風景に残る。

「なんだ、今の・・・・・・・・——？」

只の、娘ではない気がする。西蓮寺に用のない子が立ち寄るには、あまりにもここはへんぴな場所だ。

それに——

ただの子にしては

あまりにも——深すぎる瞳をしていた。

覺才の手記（前書き）

つれづれなるまゝに、日ぐらし

硯に向かひて、

心にうつりゆくよしなしごとを

そこはかとなく書き付くれば、

あやしうこそ物狂ほしけれ。

？『徒然草』

覚才の手記

私の記憶が薄れていかぬうちに

記録を、つけようと思った。

知り合いのこと、

そして、私自身のことを、

私の生きていた証として。

なに

死ぬまでの間の

ちょっとした、暇つぶしである。

手記

この手記は、言わば雑記帳だ。

私自身が日々生きてゆく中で感じたものを物語調に綴った、只の雑記である。

始めに断っておくが、面白い物ではない、ましてや自らの為になるような物ではない。

そのことを、始めに断っておこうと思う。

私の名前は覚才さくさいという。もとの名は覚さく。

覚才は仮の名だ

しがない随筆家をしている。

……とは言っても、私の実績など始めの著作が予想以上に売れたのみ。それ以降はてんで駄目。

今は、随筆家とは名ばかりの過去の栄誉に囚われた生活をしている。

雑記を書くこうと思ったのは、膨大な時間の暇つぶし。ちょっとした遊び心である。

——否、執着と言っても良いかもしれない。

この世に生きた証を残せぬ悲しみに絶えられないための行為——ただの自分への慰めなのだ。

この雑記はどうせ人に見せる物ではない。

頭に思った事を、とりとめもなくつらつらと書いていこうと思う。

——まずは、妻の話を書こう。

覺才の手記 二（前書き）

散らない花などないように

この世には、生があれば死もあるし、作れば壊れる。何人たりとも時の流れに逆らえず、逆らおうとしたところで無駄なあがきに終わるだけだ。

祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響きあり、というではないか。鐘をならせばいつかは鳴り止む、鳴り止まぬ鐘などありはしない。もう一度つけば音は鳴るが、それは先の音では無い。

先の音はすでに消えて無くなっている。そのような無常の理を、鐘の音で表したのだろう。

諸行無常。そんなことは、子供ですら理解できる簡単な事実だ。

だが、理解したところで、人は生に執着し、死を恐れる。物に執着し奪われることを恐れる、自分に執着し、自尊心を傷つけられる事を恐れる。

この身は永遠では無いことを知っていながら、執着が離れられられず、散らない花を求めようとするのだ。なぜだろうか、諸行無常の理解など、子供にだって出来ることなのに。

結局、理解というものは知識の延長であって、実感しそれを受け入れることとは全くべつのものなのかもしれない。

泳ぐ方法を知った所で、実際に泳げるとは限らない。水に入り、手足を動かし修練しつつ、実践での経験を積まなければ、前に進む事すら難しいだろう。

知識の上で知った所で、実際に出来るほど甘くはないし、実感できている訳では無い。そんな人間がいくら諸行無常の理を理解したところで何の意味があらうか。

古人の糟粕そうはくをなめる、という言葉がある。

古人の言葉の引用や、本などの記録上にある言葉など、古人の言葉そのままではなく、ただの古人の思想や境涯の残りかすだと、そう言いたいのだろう。

私も、その通りだと思う。

私自身、それは痛いほど感じている。

諸行無常の知識を知って、理解して、納得をしていない。

壊れることを恐れ、変わることを恐れて、必死にそれを食い止めようとあがき苦しんでいる。そして、どうしようもない諸行無常の理を目の前にして、絶望するのだ。

この手記が、いつか風化し破れ去り、無くなる運命にある事などわかりきった事だ。

だが、

頭ではそう分かっていたところで、私の感情がそれを納得していない。なにも残さずただ死ぬのは、これまで生きてきたことが全てが無駄なことだったと、そのように思えてならない。

だから、自らの慰めのために、生きてきた証を残すため、この手記を書こうと思う。

覺才の手記 二

全ては、沙代が殺された事から始まる。

沙代が死んだのは、一年前のことである。

沙代、と言うのは私の妻の名だ。私の歳が二十を少し過ぎた頃の話である。

沙代は――家に押し入られた仏教徒の僧に背を切られて死んだ。

即死だった。

私は、仕事で家を留守にしていた。

夕暮れの頃、いつものように家に帰り、戸を開けた瞬間、一人の男が、家のから飛び出してきたのだ。

すれ違いざまに男の姿を見た。

僧衣を来た——若い男。

不審に思いながらも、家に入り、妻の安否を確かめようと思った。

書斎に入ったとき、私の原稿を握りしめ、背を切られた沙代を目の当たりにしたのだ。

殺された沙代の姿を見た瞬間、意識が朦朧とし、気がつく、近くの村人に羽交い締めになれ取り押さえられていた。

目の前には、私に背を切られ血まみれの僧が倒れていた。

間違い無く、それは沙代を殺した僧であった。

手には流し場に置いてあった包丁が握られていた。馬鹿なことをしてしまった。なぜそんなことをしようと思ったのだろうか。そんなことをしても沙代が戻って来ないことなど、冷静に考える以前にわかりきった事なのに。

結局、そのまま、一年の月日が流れてしまった。

世間は沙代の事などすっかり忘れてしまった事だろう。

沙代は人に関わる事を避けていたし、私自身人というものを嫌っていた。

どちらも人付き合いを避けていたのだ。沙代の生死を知っている人間は全て、私達にとっては他人だったということになる。

人などというものは自分に関係のある事柄にしか興味を示さない。他人の生死覚えていることなど、昨晚の夕食の献立を覚えていることくらい下らない事なのだろう。

そんなことをいちいち記憶にとどめておこうと思う者などいない。

沙代は忘れられた。

沙代が死んだという事実すら記憶から忘れ去られ、それでも何の不便もなく人々は生活している。殺された事実の真相もあきらめぬままに。

だが、

なぜ沙代は殺されたのか

なぜ殺されなければならなかったのか

そんな疑問、分かった所で何になるのだろうか。

疑問が解けたところで沙代が生き返る訳もない。

沙代を殺した人間を殺したが、沙代が戻る訳でもない。

せいぜいほんの少しだけ、私の気持ちが晴れるだけだろう。

くだらない。

本当に下らない事だ。

そんなもの沙代のためでも何でもない、ただの私の憂さ晴らしではない。

それでも、

理性を失った私は、それすらの理解も出来ずに感情を爆発させ、素性の分からぬその人を探し出し、殺してしまった。

理性が、感情に負けてしまった。

自分の弱さを知った瞬間だった。

沙代が死んで、私は生きるのがおっくうになった。何のために生きているのかが分からなくなった。生きる希望を失ってしまった。

かといって死ぬ勇気もありはしない。

結局、私は人里離れた山奥の草庵に移り住み、自らの体が朽ち果てるのを待つことにした。

散らない花などありはしない。

時の流れが止まらぬのなら、
流れのままに身をさらし、そのまま朽
ち果ててゆこう。

そう、思ったのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7574w/>

ひがんのきょう

2012年1月12日21時55分発行